

## 第 53 回 佐々木賞受賞挨拶

ソマール株式会社 曽 谷 太

### 53<sup>rd</sup> SASAKI AWARD Winner Speech

*Futoshi Sotani*  
SOMAR Corp.

只今ご紹介いただきましたソマール株式会社の代表取締役社長 曽谷 太でございます。  
この度は非常に名誉ある佐々木賞を受賞させていただき、たいへん光栄に存じます。あらためて関係者の皆様に御礼申し上げます。誠にありがとうございます。



佐々木賞は設備、システム関連の受賞が多かったことから、今まで弊社は申し込んで参りませんでした。しかし、前回の佐々木賞授賞の表彰式、基調講演をお聞きし、是非弊社も挑戦させていただきたいと思い、今回初めて申し込んだところ受賞することができました。これも紙パルプ関係のお客様を始め、皆様のご協力のお陰と心より感謝申し上げます。

弊社と紙パルプ会社との関係は深く、ビジネスのスタートは弊社創立の1948年、昭和23年に遡ります。当時、アメリカデュポン社のリグナ酸エックスという名前の農薬を希釈してスライムコントロール剤リキサイドという製品名で上市したのがスタートとなります。その後、より安全な原料を用いたミクロサイド、ソマサイド、キュアサイドといった弊社殺菌、防腐剤製品へと引き継がれ現在に至っています。

さて、只今ご説明があり、今回佐々木賞を受賞させていただいた弊社歩留り凝結剤の開発の経緯についてお話をさせていただきます。弊社歩留り凝結剤は、リアライザーシリーズとして商標登録されています。そのネーミングの由来はリアルチャージニュートライザー、電荷中和剤の略称であると同時にこの薬剤が色々なことを実現できる、リアライズできるという意味を込めてリアライザーとしています。今でこそリアライザーシリーズはソマールの歩留り凝結剤として広く知られていますが、開発当初は知る人ぞ知る薬剤でした。弊社リアライザーシリーズは1998年に開発に着手しました。薬剤の上市は業界最後発で、当時使用されていなかったエマルジョンタイプの薬剤開発に注力しました。エマルジョンの長所として、当時の国内にはなかった超高分子量の画期的薬剤として歩留り効果を最大限発揮できるという特長がありました。リアライザーシリーズの開発は大きく3段階に分けられます。第1段階は製紙各社の新聞の中性紙対応となります。2004年に始まった新聞中性紙化に伴い、炭酸カルシウムを始め填料の歩留りを上げることが必要でした。超高分子量のリアライザーシリーズは、その課題を解決することができるとの評価をいただき採用されました。この採用で最後発ながらリアライザーが市場において一人前の評価を受けたと思っています。第2段階は2008年に製紙各社で建設が相次いだ洋紙高速マシンへの対応です。高速マシンでの歩留りアップが最適ということで、当時製紙各社で立ち上がった高速マシンに採用されました。第3段階はライナー、中芯、白板を中心とした板紙向けの歩留り剤の展開です。ろ水性、排水性アップによる蒸気減、系内内添薬剤の削減を目指しています。今回、弊社受賞の大きな理由となったアクティブポリマーという新技術を導入しました。アクティブポリマーは、低分子量化したポリマーのパルプ纖維への定着性が高く、また各種内添薬剤の定着性向上のために働くように予め設定したものです。アクティブポリマーを歩留り剤として導入した場合、低添加量で高い歩留りが得られ、填料高灰分鉱柄や高速マシンでも歩留りが向上します。同時に小さいフロックを数多く形成するようになるため、地合いも向上します。凝結剤に導入した場合は、ピッチ成分を凝縮することなくパルプ纖維へ定着させることができるために、欠陥数や抄紙マシン用具の汚れが低減します。

この新規技術の歩留り剤は新規歩留り剤として、凝結剤は多機能凝結剤として上市し、紙パルプ関連のお客様に提供させていただくことで多くのマシンで採用させていただく実績を積み重ねることができました。ご存じのようにソマールはメーカーであり商社です。両方の機能を備える会社として今後も紙パルプ業界に貢献して参ります。歩留り凝結剤関係ではトータルウエットエンドメーカーとして適切なアドバイスをお客様に提案できるメーカーとしての地位確立を目指して参ります。また、コーティング関連、パルプ関連に関しては、弊社資源を有効に活用し、様々な提案をして参ります。そうなることが今後も紙パルプ業界のお役に立てることと思い、会社を挙げて努力して参ります。

引き続き、紙パルプ技術協会の皆様、並びに会員各社様にもご指導ご鞭撻をお願いし、私のご挨拶とさせていただきます。この度は、このような名誉ある賞にお選びいただき誠にありがとうございました。皆様のご発展をお祈り申し上げます。